

社団法人ホース・ウィスパラー（仮称）協会設立趣意書

世界中どこにでも、そして私たちの日本史をめぐっても、戦いや生活の中に人と馬が息衝いていた。国内でも各地に馬産地があり、それぞれに馬に適した土壌や気候などの環境で、風土に合った飼育や流通が営まれてきた。地球のぐるりにオゾンホールを作りながらモータリゼーションが進む陰で、その時代を知る先人たちは、その功績を語り継ぐこともなく、年老いた。子供らは馬が何の役に立つのかを知らずに育った。同じ草食動物でも、食べた栄養を自分の体内で使い果たしてしまう牛よりも、馬から排出された糞が柔らかい土を作りおいしい野菜を作ってくれることを。馬には乗れるということ。馬が傍らにいただけで和らぐことを。日本人は忘れてしまった。

馬をこよなく愛する人々は共通してこう思う。

「馬を知るのには一生かかる。人は、その知識が役に立つ前に死んでしまう。」

小さく控えめなポニーから王者の風格漂うサラブレッドにいたるまで、どの馬も、その内面に決して消えることのない品格を備えている。いかなる状況にあっても、馬の自由な精神は健在である。愛馬家にとって、馬との連帯感は何物にも代えがたい。虚栄、妬み、悪意、欲などとは無縁の存在で、しかも力強く潔白で忍耐力と優しさをあわせもつ、まさに気高く美しい最高の生き物、馬。(Kingdom of The Horse)

農耕民族よりもさらに騎馬民族では、馬の深層心理を測り、馬を自在に操ることができる高い馬文化を築いた。近代日本では生活の中に馬文化を残さなかったが、欧米では市中に騎馬警官が現れたり、幼子にポニーをプレゼントしたり、さらに仕事内容に応じて働く馬の理想的な体型を求め、馬を人為的に改良することで適応させた。多様な品種にそれぞれの繁殖家が結集し、血統を登録している。日本では競馬という舞台を唯一目標に、サラブレッドの生産が国内での馬産のほとんどを占め、その産地も北海道日高地方に凝縮されることとなった。特定のギャンブルとして競馬は法律のもとに管理運営され、農業畜産物としての位置づけも、馬産農家が共済組合制度の恩恵を受け、様々な農業補助施策に守られてきたことも日本固有の形態である。

ところがご存知のようにどの産業においても、昨日と同じ明日が

保証された時代は終わった。過去15年間の間にIT、サービス部門の生産性が劇的に向上し、産業構造の大転換が起きた。この先15年の安寧を何が保証するのか、見分けるのが難しい混沌とした時代に入った。成功体験が色あせる。今日の成功はすぐさま過去のものとなってゆく世界。15年後の馬産業へ、今何をすべきか。

「あなたたちのスピード感覚は世の中より十倍遅い。」（日本電産永守重信社長）

地方や中小企業だけではない。親の世代の誤算を肌で知る若者たちも迷う。IT技術の新潮流の旗手たちも、会社とは別に自腹で東京都心の一室を借りる。‘知り合いの知り合い’まで出入り自由のこの部屋で、アイデアを論じるためだ。

だからこそ、多様性を担う‘異端’を企業社会に根付かせなければならぬ。

「他との違いをどう生み出すかが企業の競争力を決める。」（東大岩井克人教授）

多様性こそが次世代の成長の糧になるに相違ない。（日本経済新聞）

馬産業全体において、次世代の担い手不足となり国産活力の低下を招いている。人材‘磨けば光る原石’をどこから探してくるか。馬という動物だけにこだわらず、地球上の自然、生物、植物すべてに目を向ける。今までよく

「人づき合いが苦手で、馬の仕事に就いた。」

と聞くことが多かったが、これから探す原石は、人とも馬とも語り合えるウィスパラーたち。

馬産業の置かれている現状を直視しつつも、人と自然との新しい関わり方を踏まえ、地域の持つ豊かな自然や空間に着目し、プラス思考の発想をする。まずは

「競走馬の生産地日高に、馬術を通じた人と馬の往来を増加させ、重点的にホーストレッキングを取り巻く周辺環境整備を推進し、‘馬の道’を日常的な身近な存在として意識改革を図る。」

‘馬の道’を活用した地域振興活動‘ポニー少年団やキッズファーム’、都市と農村の交流‘カウボーイキャンプ’など、馬術競技イベントの企画と運営、馬術競技馬の生産と育成調教、馬を観光資源とした経済全体の健全な発展と、競馬と馬術に精通した人材の育成に寄与する。次の段階では、健全な北海道産ポニーやミニチュアホースの繁殖家を登録し、販売ルートの確立とアフターケアで流通を活性化させ、

「国内すべての小学校で、ポニーの多頭飼育を目標とする。」
馬産業で活躍する人々による講演やワークショップ(参加型講習会)、馬の映画100選から上映会の開催、街中での騎馬街頭パトロールやミニホースの散歩、都会の生活の中に笑顔を呼び込み、いつしか馬の存在が市中に溶け込む印象づけを行う。さらに、
「大自然の静けさの中に居ると、第六感はまだ研ぎ澄まされてくる。」

人々はまた田舎に回帰する。裸の自分を取り戻すために。

このように社団法人ホース・ウィスパラー協会は、地域経済の深刻な状況を踏まえて地域再生への取り組みが活発になされていくことから、馬文化が地域づくりや地域再生に大きく寄与することを示した。これまで個々に実施されてきた取り組みは、限られた人的資源で運営、管理されていることが多く、その設備や機能が十分に活用されているとは言い難い状況にあることから、これら文化事業の運営に関与する人材をいかに確保し、また、事業企画能力をいかに高めていくかが課題となっている。

‘馬の道’を活用した地域振興活動‘ポニー少年団やキッズファーム’を積極的に発信し、広く地域住民に理解、支持してもらうことは、馬文化の振興に極めて重要である。また地域住民のみならず、全国に向けて発信することにより、馬の生産地として他の事業に影響を与えたり、外部からの評価を受けたりすることが可能となり、その地域振興活動が一層活性化することが期待される。情報発信は事業を紹介するだけでなく、都市と農村の交流活動‘カウボーイキャンプ’への参画を促す手段にもなるが、情報発信の手法やノウハウが蓄積されておらず、人材も不足しており、有効な対策が求められている。

北海道遺産「北海道の馬文化」

全国一の馬産地日高「馬立国宣言」

企業によるメセナ活動は、バブル経済時における企業名を付した事業を中心とした文化芸術支援が多く行われた時期から、不況による停滞期を経て、再び活気を帯びてきている。近年は、企業の社会貢献活動が重要視され、従来の冠事業とは異なり、各企業が自らの理念を持ち独自の支援を行っている例が増えてきている。企業などの民間団体も地域の一員であるとの自覚のもと、その立地する地域の文化芸術活動を積極的に支援するとともに、自らの事業ノウハウや人材などの経営資源を生かして、地域文化振興の重要な担い手となることが期待される。さらに、地域ではメセナに関心を有する人や企業が連絡協議会のような組織を形成する例が多かったが、その中で法人格を取得し、より安定した形態で文化芸術活動を支援しようという動きが盛んになってきている。地域文化の振興に当たっては、このようなメセナ意識の高い企業の協力を得ることがますます重要となってきている。特に子供たちの活動の推進に当たっては、学校教育担当部局との連携、協力が重要になっている。それに伴い、社員家族が地域における活動に積極的に参加できるよう、勤務形態の弾力化や参加する意欲を引き出す仕組みを導入することにより、社員家族を支援することが重要になっている。

市民メセナ活動とは企業メセナの考え方を市民に拡大し、文化芸術事業の表方、裏方を担う人的支援、場所や作品などを提供する物的支援、そして寄附や協賛などの経済的支援を含む概念として、その推進及び支援を規定している。市民メセナ活動における経済的支援の一環である寄附金の受け皿として「市民メセナ基金」を発足させ、市民や企業などに広く寄附を募る市民参加型の基金であること、半分は取り崩して活用することが前提の取り崩し基金であること、半分は北海道債の購入に充てることが前提の積立基金であること、寄附金を積み立てる際に行政が上乘せ拠出する（マッチングギフト方式）ことが特徴としてあげられる。